

# しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会／浜風会会報 No.32

浜風会/入会募集中  
毎月第1,3木曜日

## 「浜風会」お陰様で30年

平成元年にスタートした「浜風会」は、平成の時代を駆け抜けました。感謝の気持ちを込めてご挨拶させていただきます。

浜風会「家庭教育」がきっかけ

昭和六十三年一月二十四日、町の有識者、約百八十人が、篠原中学校に集い、山下孝先生の基調講演の後、部落毎の分散会を行いました。そのテーマは

「篠原地区の誇りとすべき文化や子孫に伝えるべき史跡、風習はどんなものがあるか?」

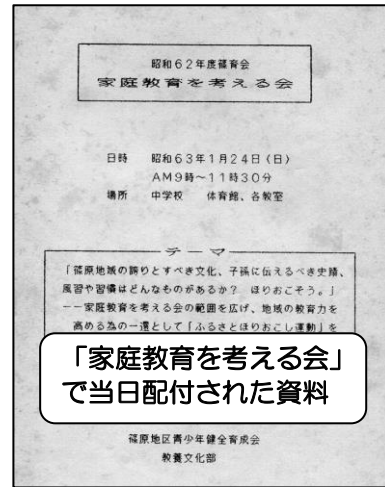
「ふるさと」運動をスタートするきっかけとする「でした。その主旨書の目標に次のようなことが書いてありました。

### ふるさとほりおこし運動の目標

篠原地域の文化を掘りおこし、それを子供にもわかりやすく表す。

- ・冊子をつくる。
- ・看板を立てる。
- ・親子で「ふるさと」を勉強しあえる環境をつくる。
- ・みんなが誇れる「ふるさと」と文化を育てる。

以上を公民館活動で広く興味のある方の参加をえて63年度から取組む。



ちよつごその頃、各公民館単位で「わがまち文化誌」の発行が始まり、篠原公民館もそれに申込みました。篠原会の「家庭教育を考える会」を計画した

教養文化部員を中心に、主旨に賛同した新たなメンバーを加え、その編集に取り組んだのは、同年五月のことです。

そして約一年かけて編集に取組み、わがまち文化誌は題名を『浜風と街道』として、平成元年三月三十一日に発行しました。

### 「浜風会」の発足と主な活動成果

そしてその文化誌編集のメンバーが、もつ少し地域のことを勉強しようとしたのが、「浜風会」で、平成元年八月のことです。それから30年、活動成果の主なものをあげます。

- ・『篠原村誌』復刻 平成二年
- ・「ふるさと資料室」の設置 同三年
- ・『私の戦争体験』発行 同七年
- ・「ふるさとウォーキングマップ」 同八年
- ・『篠原村誌続篇』発行 同十三年
- ・「しのはら歴史便り」同十四年より二回/年
- ・「協働センターまつり」に毎年展示発表

### 「浜風会」が30年も続けられた理由

先ずそれは山下孝先生のご指導があったからです。篠原小学校の教頭先生に在籍されていたご縁で、地域の文化史蹟を後世に残すことの大切さや、本物の意味を正しく知ることの重要性を教えていただきました。それ以来現在もお、年2回の講演会やバス旅行のご案内をいただいています。ありがたいことです。

次には篠原を愛している人、延べにして50名以上の会員が集ったことです。三十年にもなりますので、スタート時から活躍していただいていた元校長先生等諸先輩が退会され、会員は大きく入れ替わっていますが、現在でも28名の会員がいることは頼もしい限りです。

それから特に大きなポイントになる活動があったことです。それは小学校に「郷土資料室」を作っていただいたことと、「しのはら歴史便り」を発行し続けていることです。継続的活動の原動力になったと言えますでしょう。

### 最後に

「浜風会」を支えていただいた多くの方々に感謝申し上げますと共に、会員各位のご支援、ご協力にお礼申し上げます。

これからも会員と共に、篠原の将来につながる掘りおこしや伝承を、目指していきます。よろしくお願ひします。(会長 山下勝彦)

# 明治天皇御東幸と坪井村野立所

## 東京皇都と御東幸

慶応四年（一八六八）七月十七日江戸は東京と改められ、皇居は東京に移されることになった。その遷都の第一歩として明治元年九月二十日に天皇が京都を出発し東幸されたのである。

この東幸は約三百年にわたり政治の実権を握ってきた徳川の居城に天皇が入ることにより、天皇統治を知らしめることを意図したものであった。

東幸の警護はひときわ厳重で、諸藩兵が前後を警備し岩倉具視や木戸孝允等三千三百余人が供奉（ぐぶ）行幸の行列に加わること）した。行列は二十三日間かけて東海道を東京に下った。

東幸の記録によれば、十月一日朝吉田を発った行列は潮見坂で野立（行列を止めて休むこと）、明治天皇は初めて太平洋を遠望され、



東京日本橋高札前を通過する行列を描いた錦絵

さらに大倉戸村では海浜に野立された。潮見坂にある記念碑の台座プレートには木戸孝允の日記の抜粋が彫り込まれ、天皇が初めて太平洋を望まれた感動が記録されている。

この日は新居宿で宿泊され、翌二日朝浜名湖を船で渡り舞坂宿本陣で小休（こやすみ）本陣などでしばらく休むこと）された。

行列は坪井村で野立をされ、篠原村立場本陣で小休止、さらに増楽村で野立、浜松に午の刻（十二時頃）着かれた。

## 報奨金や見舞金の下賜

東幸途中の各所では高齢者、孝子、節婦に報奨金を、水害被災者などに救援金を合計二万七千五百人に対して下賜されたと言われている。舞坂宿の例を次に掲げる（舞坂町史）

今般 東巡に付き 御道筋住居の者 九十歳以上金五百疋 八十歳以上金三百疋 七十歳以上金二百疋 慰勞の為下賜する

明治元年戊申十月

舞坂宿 34人、坪井村 27人、篠原村 72人、馬郡村 36人に下賜された。尚金額の足は皇室関係の寄付や下賜に使われた単位で、百疋金一分とも言われている。

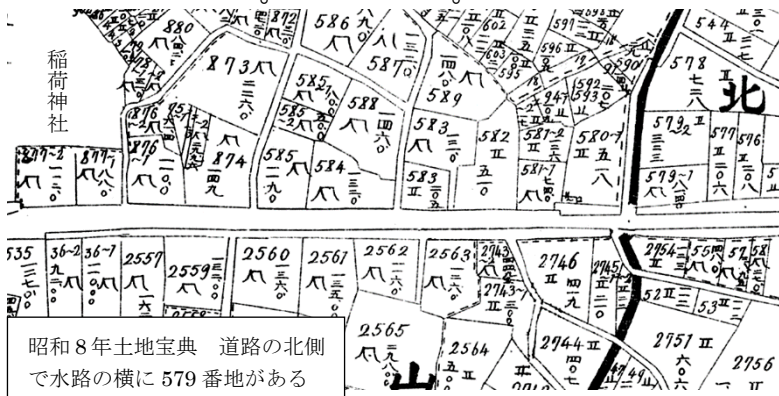
## 坪井村の野立所址を探す

昭和八年『明治天皇行幸年表』に「坪井川合治助畑御野立」と記されている。また、昭和十二年の「静岡県下御通輦関係記録」には、「坪井御野立所址、所在浜名郡篠原村坪井新田五七九番地」とある。

この二資料

から坪井新田五七九番地は明治初年頃川合または河合治助の畑であったのだからと想像できる。しかし聞き歩きをしたが治助家の特定は困難であった。法務局の登記簿上で最も古い記録は明治二十三年五月十四日で別人が記載されている。

また東幸の準備としての宿割り実地調査が五辻弁事一行により新居浜松間を明治元年九





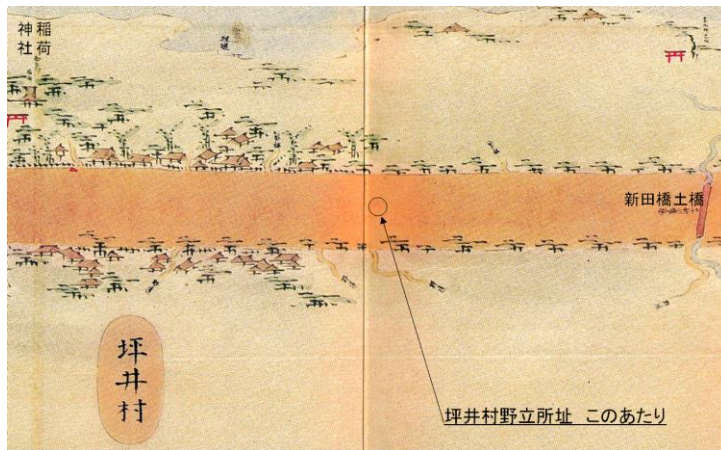
月十一日に行われている。その結果小休・野立場所は次のようになっていた。

- 御小休 舞坂御本陣
- 御野立所 坪井村地内
- 御立場 篠原村
- 御休泊 浜松御本陣
- 坪井村の大川橋は

で想像してみたい。馬郡村と坪井村は街道沿いに家が続き、稲荷神社を越してしきに新田の松並木に入る。ここから南を望めば、秋晴れのもとに刈り取られた田んぼと稲束が掛けられた

どこか。昭和八年土地宝典では、新田に二本の水路があるので、このいすれかであるが、番地から追えば西側の水路の横となる。浜風会でここまでを報告したら、坪井では西側の水路を以前「だいが」と呼んでいたとすぐに指摘があった。五辻弁事は調査の時これを「大川」と記録したと推定して良いだろう。以上から水路の横の五七九番地あたりとなる。

さて隊列が止まり輿の上から明治天皇はどのような風景を眺められたのであろうか。文化三年（一八〇六）に完成した東海道分間延絵図



更に遠くには堤防が見え、北は遥かに湖北の山々を望まれたであろう。野立所址のその後 明治以後、各所の野立所址には記念碑が建てられた。天竜川以西では、潮見坂、大倉戸村、増築村、永田村（今の和町）である。坪井には建てられることがなかった。

南だけは環状線の一部としての道路となったが、北側には「だいが」と呼ばれていた水路が残っているのが分かる。その後平成十六年（二〇〇四）環状線が開通してこの場所は旧東海道



（県道）との交差点となった。明治天皇は明治元年十二月京都へ還幸され、日程は短縮され野立の記録はない。篠原村立場本陣に保存されている「御東幸御小休控帳」には明治元年と二年に3回の小休が記録されている。

維新を強く感じた村人たちが、三千人を超す行列は村人の想像をはるかに越していたであろう。通過をどのように見守ったであろうか。一般人が書いた記録が見当たらないのが残念であるが、激動の時代の変わり目を見たに違いない。

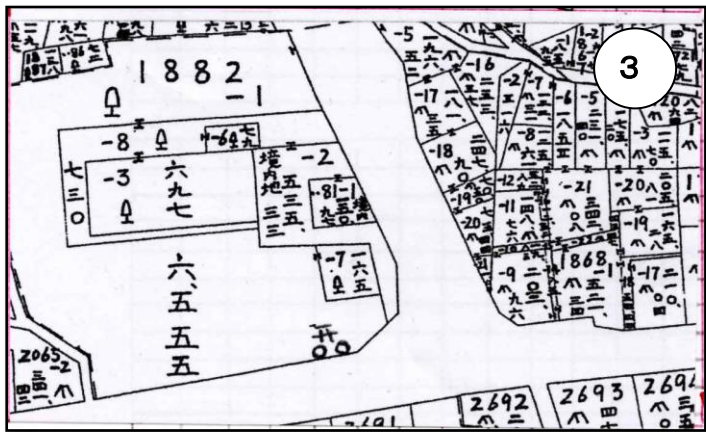
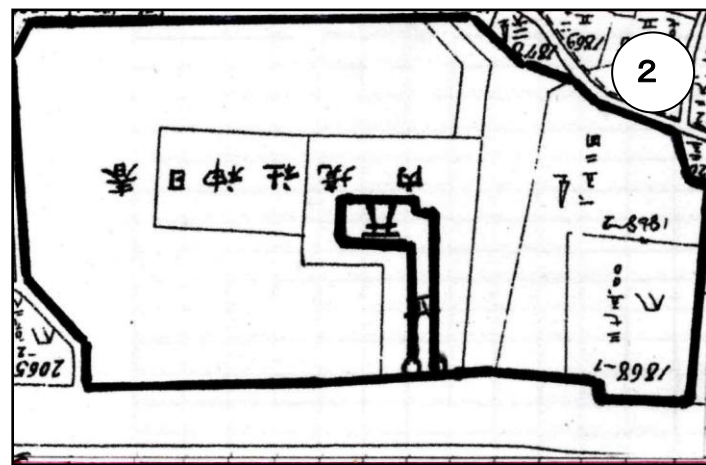
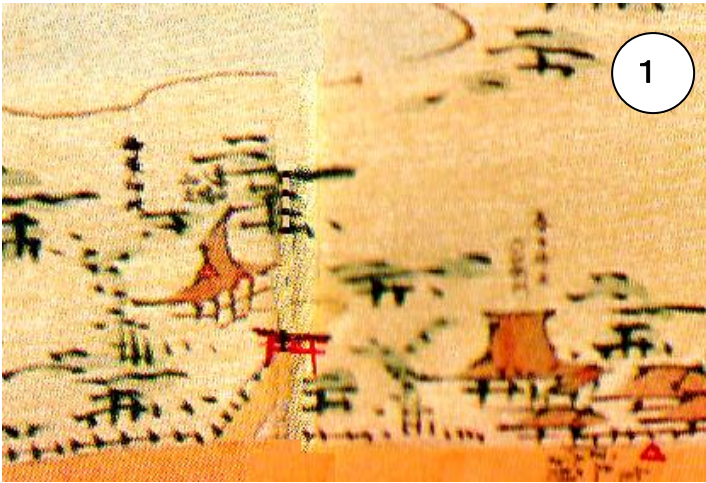
（鈴木 忠）

# 馬郡村の氏神様春日神社について

応永二年(一三九五)に日朝上人により勧請された事や、春日大明神の事、津毛利神社の事は平成二十一年七月発行の当会報15号により既に紹介されています。

今回は境内地及び神社敷地の移り変わりについてふれてみたいと思います。

①は重要文化財になっている「東海道分間延絵図」(文化三年・一八〇六)に描かれた春日神社です。東海道に面した鳥居が描かれており東向きの社殿には「御朱印地・春日・八幡・山王」と記され、また東側には「春日神主、六右



衛門」と記され神主の屋敷が描かれています。当時から馬郡の右氏神様として祀られていた事がこの絵図からもうかがえます。

②図は昭和八年製作の土地宝典で内太枠は旧境内地(一九二坪)で新境内地(八二一坪)が併記されています。この偶然是昭和八年に春日神社の大改修が行われた事から生まれたものと思われまます。東側の一八六番の一は神主の屋敷です。外側太枠三千余坪を有した膨大な神社敷地となっています。(北側を上にするため図面が逆になっています)

昭和八年の大改修は舞阪駅前、西・東馬郡の

氏子が総力を挙げ三万三九〇円三〇銭(当時金額)の寄付金と数多くの備品等の提供によりこの地域にはない立派な本殿・拝殿・幣殿を始め大鳥居、神池が完成しました。

その当時の舞阪駅を中心とした養鰻業の隆盛さがうかがえます。

③図は昭和40年に完成した雄踏町に通じる県道の完成後の図面です。春日神社は県道の西側だけとなり、昔②図と比べ神社敷地は約半分となりました。

この工事により、鳥居(大正九年堀内國作氏寄進)と石灯笼二基(文化五年遠州屋傳兵衛寄

進)と村中安全(元治元年)が県道の真ん中になったため、現在地に移転しました。

(藤田博辞)

浜風会会報第32号  
篠原協働センター同好会「浜風会」  
(篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)  
編集委員 委員長 山下勝彦  
鈴木幹久 鈴木忠 藤田博辞  
発行責任者 山下勝彦  
発行平成30年1月1日  
連絡先：浜松市篠原協働センター